

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00441

研究課題名（和文）長い18世紀における原子論の影響による主体・共同体言説の多様化に関する学際的研究

研究課題名（英文）An Interdisciplinary Study on the Diversification of Discourse on the Subject and Community due to the Influence of Atomism during the Long-18th-Century

研究代表者

川田 潤（Kawata, Jun）

福島大学・人間発達文化学類・教授

研究者番号：70323186

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は初期近代に再発見された原子論が、「長い18世紀」において近代的主体と共同体をめぐるユートピア言説に与えた影響について学際的に明らかにした。原子論の本格的な受容により、神と切り離された人間と世界に関する考察が、諸分野で深められていく過程で、原子論に端を発した新しい主体、共同体、そして両者の関係性が、商業言説等と結びつき、近代国家という枠組みだけではなく、グローバルな広がりの中でも重要な意味を持ち始めた様子、原子論の浸透に基づいたユートピア言説の転換・発展期における、科学、共同体、主体の関係性の変化と多様化の過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、(1) 精神性・道徳性重視のユートピア言説（研究）を、物質の重要性を認識することにより見直し、(2) 「長い18世紀」という観点から、科学立国思想を、より現実的な科学と国家と主体の関係性の模索の過程として検討し、(3) 主体と共同体に関する理論基盤としての原子論の再評価、及び、その近代・現代的な意義を再考察した点において、学術的意義がある。原子論の観点から、「長い18世紀」におけるユートピア言説と主体と共同体の関係性を見直しを行うことで、21世紀現在における人間の精神性と肉体性との関係の見直し、文学/文化研究、人文学の役割・意義をめぐる問題を再検討した点で、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study is an interdisciplinary study of the impact of the rediscovery of atomism in the early modern era on the utopian discourse of the modern subject and community in the “long eighteenth century”. The study shows how, with the full-fledged acceptance of atomism, the consideration of man and the world, separated from God, was deepened in various fields, and how the new subject, community, and the relationship between the two, originating in atomism, began to be associated with commercial discourses, etc., and took on important meaning not only within the framework of the modern state, but also in the global sphere. The study also revealed the process of change and diversification of the relationship between science, community, and subject during the transition and development of the utopian discourse based on the penetration of atomism.

研究分野：英語文学

キーワード：原子論 ユートピア 主体 共同体 私欲 公益

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景は、研究者が行ってきた、ユートピア文学・思想と科学言説との関係を重視した研究、とりわけ初期近代に再発見された原子論が、単純な世界構成に関する哲学(科学)思想ではなく、人間の精神と肉体をめぐる重要な概念であることに注目し、近代的な主体/共同体の根源をなす思想であるとする考え方である。このような考え方に基づき、原子論が浸透し、本格的に様々な分野に影響をもたらす「長い18世紀」という時代におけるユートピア言説との関係を検討することの必要性を認識した。この時代、原子論は哲学/科学としてだけでなく、ロック、カントにつながる、世界と人間の関係性、すなわち現実の認識の仕組みと認識する主体の見直し等と結びつき、新たな共同体概念をもたらす。更に、この新たな共同体の概念は、「長い18世紀」において、商業言説等と結びつき、共同体の利益とグローバルな市場の中での共同体のあり方に関する新たな考え方も産出し始める。

このような方向性の先行研究としては、科学立国による理想国家建設という思想が社会の広範囲にわたり与えた影響を考える、D. Albanese, *New Science, New World* (1996) 等、科学により従来の国家の欠点を補うことが可能との思想が生まれた状況を明らかにしたものがある。原子論に関しては、近代主体・社会との関係を明らかにした C. Wilson, *Epicureanism at the Origins of Modernity* (2008) 等、哲学・科学史の観点からの研究があり、従来否定的に扱われてきた原子論(とそれに伴う快樂主義)が、近代にとって重要な概念として機能していることが明らかになってきている。本研究は主にこのような2つの海外の研究動向に加え、M. H. McMurrin and A. Conway, *Mind, Body, Motion, Matter* (2016)、George Makari, *Soul Machine: The Invention of the Modern Mind* (2015)等の、近代に始まる身体と精神の関係性の変化の重要性とその後の展開を論ずる研究を参照している。近代的な身体と精神の形成過程をめぐるこれらの議論は、ユートピア言説の変容と多様化を考察する際に不可欠の視点であるとともに、現代における、文学/文化研究の意義を考えることとも結びついており、これらを総合的に考えることが本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、「長い18世紀」において原子論が主体と共同体の変容に与えた影響とユートピア言説の関係性、とりわけ、この時期の科学思想とユートピア言説を結びつけ、原子論の受容という観点から科学思想とユートピア言説の関係性を明らかにすることを目指した。原子論の主体/共同体論としての重要性はこれまでも指摘されてきたが、等閑視されてきた諸テキスト群の分析と結びつけた研究はほとんど存在しておらず、本研究は、「長い18世紀」における、ユートピア言説の系譜と原子論の受容・浸透の意義を踏まえた上で、具体的に多様なテキスト分析することを目指した。科学の発展を、共同体に与える<利点/弊害>という二項対立的な考えで捉えるのではなく、科学と主体の関係性からユートピア言説の変容を明らかにすることを目指し、とりわけ「長い18世紀」に浸透した原子論に注目し、初期近代的主体が近代的な主体に変化する際、身体と精神の位置づけがどのように変化したかを解明し、「理想」国家のあり方の再創造/想像の過程を明らかにすることを、本研究の目的として設定した。

3. 研究の方法

本研究では、原子論の幅広い受容と展開がユートピア言説に与えた影響を学際的に研究することにより、「長い18世紀」における(理想的な)主体と共同体に関する言説の変容と多様化を明らかにするために以下の方法に基づき、研究を行った。

研究の第1段階で、研究者のこれまでの科学とユートピアの関係性、初期近代における原子論の再発見に関する研究を基盤に、「長い18世紀」前半のテキストを中心に、以下の3つの手順で研究を行った。(1)原子論に関する近年の研究成果(美学的・認識論的受容の再検討等)をユートピア言説と結びつけるため、2次資料を収集・分析し、理論基盤を明らかにした。その後、この理論基盤に基づき、1次資料を収集・分析したが、その際、イギリスに限らず、国際的な広がりの中で原子論とユートピア言説との結びつき方の異同を明らかにした。具体的には、フランスとイギリスでの原子論の受容のされ方の異同を確認した。とりわけ、ホッブズの思想の18世紀への影響に着目し、その受容/拒絶の過程の整理をした。(2)「長い18世紀」の科学言説については、これまでのユートピア言説の分類・整理に基づき、ユートピア言説と結びつけられてこなかった科学言説のテキスト群の収集・分類・分析を行い、新たな形で両者の結びつきを明らかにした。このような作業を通じて、具体的には、ユートピアと科学、とりわけ、原子論と産業・商業の結びつきに基づく新たな共同体言説を明らかにした。(3)(2)の研究を行う上で、ユートピア言説分析の理論基盤に関して、ユートピアを静的な理想の青写真と捉えることの肯定的な面

を再評価した。同時に、多様な言説が出会い、新たな可能性を作り出す空間（「未だ現れざるものとしてのユートピア」）という認識も再検討した。このような作業を通じ、科学と共同体の関係について、< 幸福な / 不幸な結びつき > という二項対立ではなく、両者の変容の可能性としてユートピア言説を考察するための理論的視座を明らかにした。具体的には、原子論の影響を受けた科学が、現実の政治、経済、商業言説等と結びつき、倫理無き欲望する存在という否定的な主体と共同体を産み出すと同時に、実践・実用的な欲望する存在という肯定的な主体と共同体も産み出す過程を検討した。

研究の第2段階では、「長い18世紀」後半に重点を置き、以下の2つの手順で研究を進めた。(4)第1段階の(1)～(3)の成果に基づき、「長い18世紀」の後半を中心とし、原子論と科学言説の観点からユートピア言説を詳細に検討し、原子論の影響を明らかにした。具体的には、以下の3方向から分析を行った。-1)「長い18世紀」のユートピア言説を、具体的テキスト分析を通じ、その解釈のための理論基盤を整序し、主要な要素を分類・整理した。-2) 原子論の観点から共同体言説の詳細な分析を行い、上記 -1) の分析と結びつけた。-3) 原子論の観点から主体言説の詳細な分析を行い、上記 -1) の分析と結びつけた。このような作業で、原子論が浸透する時代におけるユートピア言説の変容・多様化の過程を明らかにした。(5)ここでは、科学言説・原子論のテキストを中心に分析し、(4)の成果と結びつけた。具体的には、-1) 原子論のテキストをユートピア的観点から分析し、(4)を補完し、-2) 科学言説のテキストをユートピア的観点から分析し、(4)を補完した。中間報告等で、他研究者からの客観的、批判的な検討を受け、研究の意義と方向性について再確認を行った。

第3段階として、(1)～(5)の成果を踏まえ、「長い18世紀」全体の原子論、ユートピア言説、科学言説について資料を補い、科学言説と(理想の)共同体をめぐる諸言説の関係性について学際的に総括し、従来の科学と共同体の二項対立的枠組みに変更を迫り、ユートピア言説が果たす役割を(再)確認した。

4. 研究成果

第一の成果として、近代における魂、精神、肉体との関係性をめぐる理論基盤を整序し、それに基づき、18世紀イギリスにおけるギリシア、ラテンの受容について研究を行った。とりわけ、原子論の言説に「崇高(サブライム)」概念の要素が存在していたこと、そして、この要素が原子論において果たした役割と18世紀の古典受容との関係について研究を進めた。具体的には、トマス・クリーチによるルクレティウスの『事物の本質について』の英語訳の出版を、同時代のジョン・イーヴリン、ネーハム・テイトたちがどのように受け止めていたかを、訳書に献呈された詩に注目して分析を行った。その結果、この翻訳は英語と英国の文化を改善する試みとして肯定的に捉えられており、版を重ねたことが明らかとなった。その上で、このような肯定的な受容の結果、ルクレティウスのテキストが18世紀の農耕詩的な古典受容の流れに組み込まれることになり、それと同時に、それとは異なる、変化・非調和を志向する要素をもったテキストとして受容されてもいたことを明らかにした。最終的には、このような観点から考えた時、ロマン派の美学に原子論がどのように影響を与えたかについての研究にもつながる可能性を明らかにした。

第二の成果として、原子論についての理論を整序し、原子論と主体・共同体について、17世紀後半から18世紀後半までの、具体的なテキスト分析も含めて、検討を加えた。原子論が各主体における私的な欲望の形成に果たした役割(具体的には「蒐集欲」という観点)と、その私的な欲望が公共の利益と結びつく可能性(具体的には、「郷土愛」という観点)について検討した。マンデヴィルの「私悪と公益」との結びつきの可能性について、複数のテキストにおいて確認をしたが、とりわけ、17世紀末から18世紀初頭に生きたリーズの古物蒐集家にして王立協会フェローともなったラルフ・ソースビーが蒐集欲という形でいかに自己を成型していったのかを、その日記を用いて分析を行い、個人の欲望が地域共同体(そして、国家)の「理想的な」アイデンティティの形成と結びついていく過程を明らかにした。

第三の成果として、「長い18世紀」のユートピア言説を原子論と共同体言説の結びつき、及び、原子論の観点から主体言説の分析を行い、原子論が浸透する時代におけるユートピア言説の変容・多様化の過程を明らかにした。具体的には、主に原子論が普及する中で、個人の欲望がどのような形で表象されているのか、それが共同体・国家をめぐる言説とどのような関係を結んでいたのかを、いくつかのテキストを用いて検討した。とりわけ、18世紀のニュージーランド近辺をめぐる架空のユートピア旅行紀『ボウマン旅行紀』をとりあげ、同時代の蒐集家にして王立協会会長ジョゼフ・バンクスという人物表象(評価と批判)と結びつけて、蒐集という個人的欲望が、商業・貿易に基づく「理想的な」共同体言説と結びつく(不)可能性について明らかにした。

第四の成果として、内乱期における共和主義思想と原子論との関係について研究を行った。とりわけ、ヘンリー・ネヴィルのユートピア作品『パインの島』、共和主義政体の具体論『蘇りしプラトン』を扱った。前者については、出版当時の国内外の政治状況を考慮に入れることで、本作のユートピア的モーメントの重要性を検討した。その結果、第一に、この物語が血統に基づく絶対王制の有効性と欠点を明らかにし、王権を評議会によって制限する共和主義的ユートピア性をもつことを指摘した。第二に、物語が結末部において、国内の反乱を鎮圧するために、国外

勢力(オランダ)の力を借りることに注目し、王政復古後のイングランドと共和制・先進商業国家オランダとの協調関係の必要性が提示されていると指摘した上で、更に、この物語が最終的には、「農業と園芸に基づく国家」である「パインの島」の礼讃で終わることに着目し、単純にオランダとイングランドの協調関係ではなく、いまだ商業的要素(と結びついた公共の徳)を理想国家に取り込むことの不可能性も示されていることを指摘した。すなわち、農業共同体を基盤とする中世的理想国家像から、商業と個人の欲望が結びつく資本主義、帝国主義的国家像への移行期において、『パインの島』は不在の理想項を示すユートピア的モーメントをもつテキストであることを明らかにした。『蘇りしプラトン』については、この前後の時期にめまぐるしく変化するイギリス、オランダ、フランスの国際関係を考慮に入れつつ、その共和主義的言説の特徴/変化を、この時代のユートピア的言説/衝動との関係で考察した。『蘇りしプラトン』は一見すると、中央政府の仕組みという都市部を問題にしているように見えるが、実は、都市部については放任し、権力は土地所有というカントリー的なところにあるという構造をもった国家像であることを明らかにした。ただし、イギリスの大土地保有者こそが商業と密接に関係している、あるいはしていく、という視点は、『蘇りしプラトン』ではまだ語られないままであることも明らかにした。

第五の成果として、原子論が近代的な主体の個人的かつ商業的な欲望、魂の存在を否定する無神論の原因として批判的に捉えられつつも、同時に、その主体の欲望の効率的な活用の言説の誕生に深く関わっていたことを明らかにした。具体的には、原子論の観点から、「長い18世紀」におけるユートピア言説と科学言説との関係性の中で、主体と共同体がどのように捉えられていたのかを、ジョゼフ・グランヴィルの超自然現象をめぐるテキストとそれをもとにしたジョゼフ・アディソンの『ドラマー』という喜劇で検討した。アディソン等の定期刊行物や演劇のテキストが、「亡霊」をめぐるゴシック的な傾向の肯定(イギリス文化の形成)と批判(非科学的なもの否定)をもたらしていたこと、それにより、理性を中心とした啓蒙思想の肯定と批判という二重の言説として機能していたことを明らかにし、それがカントリーとタウン(コート)という政治・経済構造と関係していることを明らかにした。

これらの研究成果を通じて、21世紀現在における、理性と感覚(とりわけ反感と共感、同感をめぐる)の対立状況を検討し、文学/文化研究、人文学の役割・意義をめぐる問題を、文系と理系という単純な二項対立では捉えないこと、そしてそのような考えが、現在の民主主義をめぐる諸議論において重要であることを、本研究は明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川田潤	4. 巻 34
2. 論文標題 英国における原子論の需要：古典の受容とサブライム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福島大学人間発達文化学類論集	6. 最初と最後の頁 71-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川田潤	4. 巻 19
2. 論文標題 結合から分割へ マーガレット・キャヴェンディッシュの原子論における多様性と秩序の問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『十七世紀英文学における生と死』	6. 最初と最後の頁 237-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川田潤
2. 発表標題 17世紀後半のユートピア的モーメント
3. 学会等名 十七世紀英文学会東北支部2022年度 第2回7月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川田潤
2. 発表標題 Henry Nevilleとノのユートピア的衝動
3. 学会等名 十七世紀英文学会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川田潤
2. 発表標題 ニコラス・ロウと名誉革命以降の文化戦争
3. 学会等名 十八世紀英文学研究会（日本ジョンソン協会関西支部）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川田潤
2. 発表標題 原子論の受容 / 需要と詩的想像力と「美学」 Thomas Creech のLucretiusの翻訳をめぐる問題
3. 学会等名 17世紀英文学会東北支部
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川田潤
2. 発表標題 恐怖と笑い -- 商業化・政治化される幽霊譚
3. 学会等名 第19回東北ロマン主義文学・文化研究会シンポジウム
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 十七世紀英文学会編（執筆：齊藤美和、川田潤、越朋彦、松平圭一、三原里美、HONDA Marie、岩永弘人、滝口晴生、鳥養詩乃、久野幸子、堀内直美、佐々木和貴）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 271
3. 書名 十七世紀英文学における病と癒し	

1. 著者名 日本ジョンソン協会編（執筆者：服部典之、福本宰之、内田勝、Hiroki Kubota、川津雅江、原田範行、川田潤、三原穂、西山徹、金津和美、鈴木実佳、廣田美玲、吉田直希）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 284
3. 書名 十八世紀イギリス文学研究第7号 変貌する言語・文化・世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------